



夜のベンガルールの街の様子

IT産業の集積地 ベンガルールで商習慣、 文化を知り、学ぶ

インドのスタートアップ企業、日系企業でインターン体験 理工学部、国際経営学部 学生4人の報告

理工学部の設置科目「グローバル・インターンシップ」(担当: 藤井真也特任教授) と、国際経営学部の設置科目「インターンシップ」(担当: 国松麻季教授) で学んでいる学部生10人(理工4人、国際経営6人)が夏休み期間の8～9月、「インドのシリコンバレー」といわれる南部の都市、ベンガルールを拠点とするスタートアップ企業、日系企業で、インターンとして仕事に従事しました。

1カ月の経験を自身の貴重な財産として帰国した10人のうち、理工学部1年の大川真利奈さんと野口叶夢^{かなめ}さん、国際経営学部3年の棚橋里緒さん、同2年の飯野桜太^{おうた}さんの4人に、インターンの仕事を通じて得た学びや、今後の糧となったこと、日本との商習慣の違い、交流したインドの人々の気質や特長、国柄などについて話を聞きました。

「起業してずっとインドとつながりたい」

理工学部1年 大川真利奈さん／派遣先：Rakuten India Enterprise Private Limited

広告システム全体を統括する「Global Ad Technology Department (GATD)」という部門に所属し、自社開発アプリなどのワイヤーフレーム（サイト設計図、画面デザイン）について、使い勝手の良さを追求する仕事に携わりました。

日本企業で8年間、勤務経験のあるインド人のプロダクトマネージャーをメンター（指導・助言者）として、ワイヤーフレームを作り、どのようなサービスがユーザーに受け入れられるのかを、試行錯誤しながら取り組みました。仕事の過程で疑問に思ったことにすぐに回答してくれる、高い専門性を持った社員からも良い学びを得られました。

聞き取りづらかった英語も1～2週間で理解できるようになり、インターン期間をより有意義に過ごそうと心かけたのは「迷ったら尋ねる」「ためらわずに聞く」ということ。ロゴや写真などサイトを構成する素材を渡され、「ワイヤーフレームを作って」と最初に指示されたときは「困ったな」と思いましたが、「試行錯誤しながら何とかする」ことも大事だと気づきました。



「迷ったら尋ねる」 「試行錯誤して何とかする」

もう一つ大切に感じたのは、長い時間を過ごす場所である職場の環境です。Rakuten India では社屋各階にソファが置かれ、コーヒーや菓子で一息つける場所、仮眠可能な場所、ビリヤードなどができる遊びの空間、ジムも併設されていました。休憩したいときに休憩できるという感じで、働いている皆さんはとても楽しそうな雰囲気でした。

私は以前から「インドに行ってみたい」「起業したい」という思いを抱き、インドに留学経験のある日本人の起業家から「人生が変わる」と勧められて参加しました。平均年齢が若く、熱気にあふれた国であることを肌で感じ、人口も多く、日本以上にハングリー精神に満ちた競争社会という印象を受けました。しかし、競争はあっても、インド人は人と人の結びつきを大切にする親切で優しい人たちです。

充実した1カ月を過ごした今回の経験があって、起業意欲はますます高まりました。AI（人工知能）エンジニアとして、インドの人たちとずっとつながれるような事業に携わりたい。インドの人に日本をもっと好きになってもらえるような起業、たとえば観光に関する起業を手がけたいと考えています。



インターンの修了証書を受け取った大川真利奈さん（左）

中央大学のグローバル・アントレプレナーシップ教育

世界最大の人口を有するインドにおける最大のIT産業の集積地で、学生たちが1カ月間暮らし、仕事に携わる中で、日本と異なる特有の商習慣や文化を知り、イノベーション創出に結びつくアントレプレナーシップ（起業や新たな価値を生み出していく思考や姿勢）を培ってもらうのが、今回のインターンシップの狙い。将来の日印協力を担う人材輩出に資する目的もある。

派遣期間は2024年8月16日～9月17日。インド政府・企業の協力で実施され、派遣前に駐日インド大使館で行われた壮行会で、学生たちはシビ・ジョージ大使から激励を受けた。今後も春休み、夏休みの長期休暇を活用し、年2回実施する予定。文部科学省が推進するアントレプレナーシップ教育の一環でもある。

REPORT #2

インド的思考「躊躇するな」
会話に割り込む「度胸」つく理工学部1年 野口叶夢さん^{かなめ}／派遣先：Rakuten India Enterprise Private Limited

当初2週間はプロダクトマーケティングチーム、後半はマネジメントチームに所属し、チームの業務の全体像の把握と、電子メールによるマーケティングの手伝いなどを担当しました。

将来の就活も考慮に入れ、エンジニアの数が米シリコンバレーを上回るベンガルールのIT企業ということで参加しましたが、一番に学んだのは社会人としてのコミュニケーションの仕方やマナーのほか、企業にはそれぞれ共有する価値観や文化があるということです。

Rakuten India の社員千数百人の99%はインド人でしたが、「常に改善、常に前進」「スピード!! スピード!! スピード!!」といった日本と同じ「楽天主義」に基づくコンセプトが浸透していました。私のメンターも「プッシュ、プッシュ、プッシュ!」とスピード感を高めて仕事をするよう、声をかけてきたことを覚えています。契約を増やすという課題のプレゼンテーションで解決案を評価されたときは、やりがいを感じました。

意見をはっきりと口に
するようになる

インド的な考え方ではないかと感じた印象に残るエピソードを紹介します。

メンターは非常に多忙な方でしたが、「朝夕に5分間、2人でミーティングをしよう」と言葉をかけてくれていました。ところが、他の社員との会話が途切れずに、話せない場面が頻繁にありました。



インターンの総括プレゼンテーションを行う野口叶夢さん

会話をさえぎって割り込んでいくのは度胸が要り、日本人の感覚からすると躊躇^{ちゅうちよ}してしまうところです。しかし、メンターは「何よりも自分の時間を大切にしないといけない」「躊躇するな」と何度も言ってくれました。

おかげで、以前より自分の意見をはっきりと口にできるようになりました。場の空気を読むことの多い日本にどこか息苦しさを感ずるような人にとって、インド社会は居心地が良いかもしれません。

インターンとして働くこと、英語を使って働くことなど、何もかもが初めてで、将来海外で働くことを視野に入れたとき、外国人とのコミュニケーションや、相手の文化を知る大切さに気づかせてくれた貴重な経験でした。日本での就職を考えれば、国内の企業でもインターンとして働いてみたい。就活には、データサイエンスやプログラミングの知識をさらにつけて臨みたいと考えています。



会社の休日ボランティアで木を植える活動をしたときの一枚(右端が野口さん)

インド企業のスピード感 「その場で試行錯誤、失敗なら即改善」

国際経営学部 3 年 棚橋里緒さん／派遣先：Mylin

AI を活用した技術を他企業に提供する Mylin（メイリン）のマーケティング部署で、動画配信サービスに活用できる技術を他国の企業に売り込む仕事を担当しました。従業員 44 人の小規模な会社ですが、技術力に定評があり、信頼されていました。

たとえば、サッカーの試合のインターネット配信で、回線速度の比較的遅いインドネシアでも高画質の映像を視聴可能とするような技術力です。私の売り込み先もインドネシアをはじめとする国の動画配信企業でした。もちろん、国によって人気のある動画は異なるため、それぞれ

の市場に適した戦略、アプローチの重要性も学びました。

フレンドリーな職場で、初日から、疑問に思ったことを何でも聞きやすい環境でした。英語でのコミュニケーションは、IT 企業独自の難しいビジネス用語もありましたが、私は以前に 6 年半の米国滞在経験があり、ほとんど問題はなかったです。

英語力生かし、海外で働く

何か新しいことに挑戦するとき、「計画を練りに練る」という日本企業が多いのに対し、インドは「やってみて、その場で試行錯誤を重ねる。失敗したら改善する」というスタイルです。何よりスピード感に違いがあると感じました。

インターンの最終プレゼンテーションに向けて、ネット上の他国の市場調査がうまくいかずに悩んでいたところ、メンターのアドバイスで乗り切り、帰国後にオンラインで社長ら現地の幹部を前にプレゼンを実施できました。一からマーケティング戦略を立案し、やり遂げることができたため、非常にやりがいを感じたのを覚えています。

日本のような「おはようございます」「おつかれさまでした」といった挨拶の習慣がない会社だったので、私が挨拶を欠かさずにいると「すごく礼儀正しいね」と逆に驚かれました。でも、会う人は皆、優しくフレンドリーで、インドの人々には親しみを感じています。

強みである英語を生かして海外で働くというのが、高校生の頃からの私の夢でした。帰国後に就活を始めたのですが、もう一度海外へインターンに行きたいとも考えています。急成長の国のビジネスの現場を実際に感じられるところがインドの魅力だと思います。



オフィスで同僚たちと（右から2人目が棚橋里緒さん）



レストランで食べたインド料理



ベンガルールを走る鉄道

REPORT #4

意見をぶつけ合うことで生み出す価値

国際経営学部2年 飯野桜太さん^{おうた}／派遣先：Yulu

Yulu(ユル)はレンタルの小型バイクを提供する2019年設立のスタートアップ企業で、急成長を遂げています。私は約60人が働くビジネスチームの所属でした。現地で需要の大きい小型バイクを置く街中の場所(ステーション)の提案を行うなど、国際経営学部の授業で学んだ理念を実践できる面白い仕事と感じました。

一番の収穫はインド人のマインドセット(心構え)を学べたことです。国民性や価値観が日本とは違う。「私がやっている」という意識が強く、自分の能力や仕事にプライドを持っていて、積極性やハングリーさを感じました。自分の意見を強く持っているので、ぶつけ合うことで、生みだせる大切な何かがあるんです。

働き始めて2週間後、ビジネスチームのリーダーとステーションの設置場所で押さえるべきポイントの議論になった際、「それは違う」と主張するリーダーに対し、「でも日本ならこうしている」と繰り返し反論すると、「それは良い視点だ」と反応が変わっていきました。相手の意見を必要以上に尊重しがちだった私も「やるしかない」というマインドの大切さに気付き、自分を主張する度胸がついたように思います。

ビジネスライクな雰囲気職場で、最初はなじめるか不安もありましたが、週2回のプレゼンテーションの場で、私への質問やリアクションが増えてきたとき、上司や仲間メンバーとして認められたと、やりがいを覚えました。

トライアンドエラー

「動いてダメなら、またそこで考える」

インド人で50歳代のYulu創設者は、東大大学院で学んだ経験があるという凄腕のビジネスマンでした。「日本人は考えすぎる。まず動いてダメなら、そこでまた考えればいい」という考えで、急成長するビジネスシーンの波に乗り遅れないよう、トライアンドエラーで取り組む姿勢が不可欠とみていたのでしょう。

学生のうちに起業したいと考えている私に、「日本で同



チームメンバーと休憩中に撮影(右端が飯野さん)



Yuluの受付

じ起業をするなら50台貸すよ」と即座に答えてくれるなど、起業家としてスケールが大きい人でした。

「思ったことを包み隠さずに話してくれる」というインド人の人柄が好きになったと同時に、起業意欲もさらに高まりました。マレーシア、シンガポールなど伸びている国や地域のビジネスを知るため、中大在学中に海外で一度はインターンとして働きたい。

私は海外に行くのも初めてでしたが、日本人にない新しい価値観を知りたい人に、インドはうってつけの国だと思います。

★ベンガルール…インド南部のデカン高原にあり、IT大国であるインド最大のIT産業の集積都市。都市圏人口は約1200万人。インターン生が滞在した8～9月は日本のような蒸し暑さもなく、避暑地のような気候で過ごしやすかったという。

★スタートアップ企業…革新的なアイデアやイノベーションにより社会に変化をもたらし、創業から数年で急成長する企業のこと。



前回は悔し涙…

藤原正和監督(右奥)の指示に耳を傾ける選手たち ©Getsuriku

正月はうれし涙を見たい

第101回箱根駅伝予選会 学生記者6人が現地リポート

陸上競技部12選手が粘りの走り、
6位で突破



チームトップでゴールした白川陽大選手 ©Getsuriku

2025 年新春の第 101 回箱根駅伝への出場を懸けた予選会が 10 月 19 日、東京都立川市で開かれ、選手 12 人が出走した中央大学陸上競技部長距離ブロック（駅伝）は 6 位で本戦出場権を獲得した。選手たちは季節外れの暑さに体力を消耗しながら、1 秒でもタイムを上げようと必死の形相でゴールを駆け抜けた。中大では、白川陽大選手（文 3）の 17 位（1 時間 03 分 58 秒＝日本選手では 5 位）が最高成績だった。

予選会は、午前 9 時 35 分に陸上自衛隊立川駐屯地をスタートし、市街地を経て国営昭和記念公園に至るハーフマラソン（21.0975 キロ）で争われた。本戦出場の 10 枠を懸けて、43 チームの 500 人を超す選手（各チーム 12 人以内）が出走し、上位 10 人の合計タイムで競った。

炎天下を駆け抜ける 圧倒的なスピード

学生記者 大山凜子（法 4）

中央大学陸上競技部長距離ブロック（駅伝）チームにとって 2020 年以來となる箱根駅伝予選会。フィニッシュ地点のある国営昭和記念公園に近い JR 西立川駅に「HAKUMON Chuo」取



材チームとして集合した朝の時点から、気温がぐんぐん上昇した。その暑さが中央大学だけでなく各校の選手たちを苦しめたが、大学ごとにたくさんののぼり旗がはためく公園内も気温以上の熱気に満ちていた。

出走した選手たちの顔つきは、撮影の画面越しに見ても強さや自信がみなぎっているように感じた。途中経過で、中大の暫定順位が少しずつ下がってアナウンスされると、不安げな表情になる仲間の学生記者もいたが、私は大丈夫だと確信していた。

藤原正和監督が予選会前に「圧倒的な走りを見せたい」と語っていたのを思いだし、その言葉通り、選手たちも気力を振り絞るような走りを見せていたからだ。目の前を走る選手の姿を見て驚いたのは、長距離走とは思えないほどの速さで、炎天下を駆け抜けていく、そのスピードだった。彼らなら予選会を突破できると強く信じた。

取材中、大勢の卒業生の方々が「頑張って」と、学生記者の腕章をした私に声をかけてくれた。この記事を通して、選手の頑張り、予選会の熱気、卒業生をはじめとする声援の大きさを伝えたいと、大きな励みになった。

予選会を終えた藤原監督と川田涼主務（経済 4）に話を聞くことができた。2 人とも限られた時間の中で質問に丁寧に答えてくださり、誠実さと冷静さを感じ取れた。

川田主務は「暑さが苦手な選手もいるので、第一に全員が予定通りに走ればいいなと思っていました」と語り、常日頃から選手の状態や体調を把握し、気遣っている様子うかがえた。相手が誰だろうと尊重する姿勢を忘れない川田主務の受け答えに感銘を受け、私にとって大きな学びともなった。

もちろん、予選会突破という結果は確かに大事だ。ただ、冷静に落ち着いて、この日の暑さのような困難に立ち向かう姿勢を見て、何事も結果以上に、その過程や態度が問われるということを実感した。



岡田開成選手 ©Getsuriku



阿部陽樹選手 ©Getsuriku



山平怜生選手 ©Getsuriku

第101回箱根駅伝出場校

★シード校(前年上位10校)

青山学院大
駒澤大
城西大
東洋大
國學院大
法政大
早稲田大
創価大
帝京大
大東文化大

★予選会(10月19日)通過校

順位	大学名	記録(時・分・秒)
①	立教大	10・52・36
②	専修大	10・53・39
③	山梨学院大	10・54・06
④	日本体育大	10・55・58
⑤	中央学院大	10・56・01
⑥	中央大	10・56・03
⑦	日本大	10・56・53
⑧	東京国際大	10・58・53
⑨	神奈川大	10・59・12
⑩	順天堂大	11・01・25

関東学生連合(オープン参加)

★予選会(10月19日)中央大学 選手成績

全体順位	選手名	学部学年	記録(時・分・秒)
17	白川 陽大	文3	1・03・58
24	岡田 開成	法1	1・04・28
36	阿部 陽樹	文4	1・04・58
40	原田 望睦	文1	1・05・01
47	佐藤 大介	文1	1・05・09
103	鈴木 耕太郎	法2	1・05・55
126	並川 颯太	法1	1・06・12
133	山平 怜生	法4	1・06・22
139	吉中 祐太	文3	1・06・26
218	伊東 夢翔	経済3	1・07・34
259	佐野 拓実	経済4	1・08・24
324	七枝 直	法1	1・09・50

(注) 記録は関東学連の公式サイトより抜粋

「箱根」にかける選手の思いと意地

学生記者 倉塚凜々子 (国際経営4)

秋到来を待つ私たちには肩透かしのような強い日差しの下、時折吹く風に少しだけ一息つける。そんな一日だったが、彩り豊かな各校ののぼり旗を目印に歩いていくと、多くのOB、OGが母校の予選突破を目の当たりにしようと、期待に胸を高鳴らせていた。「給水が勝負の分かれ目」ともいわれ、出場校の多くの監督が、「必ず給水するように」と呼びかける予選会となった。有力視されながら力を発揮し切れないなど、想定外の走りを強いられた選手も少なくなかったようだ。



応援の人たちが多く集まっていたフィニッシュ地点手前で、バランスを崩しても、^は這ってでも完走しようとする選手の姿を目の当たりにした。競技の厳しさとともに、選手の箱根にける思いと意地を痛感する光景だった。

季節外れの暑さに藤原正和監督も戦術を変えて挑んだという。予選通過の順位にこだわらず、走りきって本戦へとつながることに重点を置き、1年生5人を含む12人全員が完走を果たした。注目すべきは、中大の選手層の厚さを証明するように、エース格の選手たちが不在という中でも6位通過できたという事実である。

フィニッシュ地点に近い芝生広場では、出場校の卒業生や関係者がそれぞれに結果発表を待っていた。ピンとした空気が張り詰め、1位から順に通過校の名前が呼ばれると、どよめきや歓声が上がり、また静けさが戻る。「中央大学」とアナウンスされると、安堵の声とともに、正月に再び選手たちの雄姿を目にすることができると喜び合うOB、OGの姿が見られた。

競技終了後の壮行会で、真っ先に応援の声を上げたのは、中央大学応援団だった。小林良輔団長にとって、次が団長として見届ける最後の箱根駅伝となる。「磨きをかけてきた中大節(中大生歌)を届け、優勝にふさわしいこのチームを後押ししたい」と語った。

箱根本番での駅伝チームの快走を願い、わくわくする思いが止まらない。



声を張り上げる小林良輔応援団長

各校の喜びと悔しさが交錯 予選会の非情さを痛感

学生記者 影原風音 (文4)

初めて箱根駅伝予選会の会場に足を運んだ。出場する陸上競技部の選手たちの表情から、この日のために準備を整え、大学の名を背負い、伝統を引き継ぐと、熱い闘志を燃やしている様子がひしひしと伝わってきた。



真夏のような日差しに、立っているだけで汗が噴き出してくる。選手の顔からも気温の高さに苦しむ様子が見て取れた。何が起きるか分からない競走の場で、普段通りの実力を出し切る難しさも感じた。

フィニッシュ地点の昭和記念公園芝生広場では、各校の選手や関係者がそれぞれに集まり、結果発表を待っていた。予選会通過校の名前が順に読み上げられたときの選手たちの姿はとても印象的だった。6番目に「中央大学」とアナウンスされると、硬かった表情が笑顔へと一変する。その場で一礼し、表情を緩める選手の姿に、うれしい気持ちで胸がいっぱいになった。

そして、喜びと悔しが入り交じった独特の雰囲気を目の当たりにした私は、そのコントラストから予選会の非情さに改めて気付かされた。予選通過ならなかった大学も、次の目標に頭を切り替えて奮起してほしいと願う自分がいた。

正月の箱根本戦での目標について、藤原正和監督は「確実に3位以内」と語った。そう、暑い一日を戦い抜いても、ここはまだ通過点なのだ。

フィニッシュ後、阿部陽樹選手(文4)は「(中大の)集団でまとまってゴールしようと思っていたが、暑さの影響もあってばらけてしまい苦しかった。箱根本番はもっと苦しいと思う。より状態を上げて区間賞を目指して頑張りたい」と力強く語り、山平怜生選手(法4)も「本番に向け、全体的なレベルアップが必要。個人としても距離と質を兼ね備えた練習でもう一段強化し、体調管理を徹底して本番に臨みたい」と、最上級生らしい頼もしい言葉を残した。

中大の駅伝チームは選手層が厚く、全日本大学駅伝対校選手権(11月3日)、箱根駅伝にも総力戦で挑むことになる。当日出場するのは選ばれた選手だが、選手同士は大切なその日まで一緒に練習し、刺激し合い、互いを高め合っていくことだろう。

切磋琢磨して強くなる一。4年生の私も心から応援したい。

試練を乗り越えて 「箱根駅伝」の魅力を再認識

学生記者 松岡響紀（経済1）

前回の箱根駅伝は、すでに中央大学入学が決まり、テレビの前で応援していた私にとってまさかの結果。選手たちにとって、今回は箱根での捲土重来を期して挑む予選会だった。出場校の卒業生や大勢の関係者が集う昭和記念公園の芝生広場は、スタート前から独特の雰囲気包まれていた。



中大の予選会出場は2020年以来となる。競技中、陸上競技部ではない在校生の保護者の方に話を聞くと、「中大の予選会出場は珍しいので応援に来た。出場する選手全員を応援します。けがなく全力で頑張してほしい」と話していた。

10月中旬と思えない気温に、私自身もこまめに水分補給をしながらの取材だったが、暑さが選手の体力を奪ったことも疑いようがない。フィニッシュ手前では多くの選手の表情が苦しそうに見えたが、中大は見事に6位で通過し、箱根への切符を手に入れた。「出場権は大丈夫だろう」と思っていたが、5位までにアナウンスがなかったときは正直、少しあせる気持ちも生じた。

そうした厳しい争いの中でも、応援団をはじめとする沿道の中大への声援は他校を圧倒するものであり、選手の背中を後押ししたはずだ。チアリーダー部員も「選手には全力を尽くして箱根に向かってほしい」とエールを送っていた。

中大の出場選手12人のうち、1年生が5人を占めていた。藤原正和監督は「1年生にとって初めての箱根予選会ということで、相当過酷だったと思う」とねぎらいの言葉をかけ、「（全員が）これだけ戦えたことはよかったし、トレーニングの成果は出てきている。（箱根では）3位以内を目指し、優勝争いをしたい」と手ごたえを語った。

箱根駅伝の魅力を再認識できた、初の予選会取材となった。

箱根路で 「重圧に打ち勝つ走り」を 期待

学生記者 九十歩胡春（文1）

気温が25度を超えてどんどん上昇する中で、本当にたくさんの観客が中央大学を応援しに来ていた。出走する12選手中、1年生が5人と知り、自分と同年の選手への尊敬の念とともに、期待が高まった。



暑さがいつも通りの走りを妨げるのは誰もが想像できたことだが、苦悶の表情を浮かべながら走る姿に、「頑張れ」という気持ちに加えて、「どうか無理をしないで」という感情も膨らんでいった。埼玉県狭山市から駆け付けた学員会支部「狭山白門会」の田口丈夫副会長も「箱根の本戦に行ければ（予選会の順位は）何位でもいい。こんなにも暑い中で無理をせず頑張してほしい」と、選手たちを気遣った。

10キロ地点、15キロ地点などと、テレビ中継と同様に現地でも随時、出場各校の上位10選手が通過した順位がアナウンスされ、出走していない選手や関係者がやきもきする思いで時を過ごしていた。フィニッシュ地点前にはカーブがあり、どの大学の誰がゴールするか、直前までわからない。集まった人々からも「あの大学はまだか」「あの選手は来ないか」という声が飛び交い、胸の高鳴りを抑えきれない様子が伝わってきた。

結果発表で中央大学が6位で呼ばれたとき、大きな拍手、歓声とは裏腹に、選手たちの冷静でどこか満足していないような表情が心に残った。

並川颯太選手（法1）に走りの感想を尋ねると、「個人として良かったところは一つもない。力強い走りができず、チームに何も貢献できなかった」と謙遜な気味に反省の弁が返ってきた。一方で、「（箱根に向けて）自分の力を発揮できれば結果はついてくると思うので、これまで通りしっかりと、レベルの高い練習に自信を持って励む」と頼もしい言葉も聞けた。

その言葉や表情から、選手たちの目標が箱根駅伝の本戦出場だけでなく、さらに高みにあることを実感させられた。謙虚さと、自分を厳しく律する姿勢が強さにつながっているのだろうと思った。

正月の箱根路は予選会以上のプレッシャーがかかるはずだ。その重圧に打ち勝った走りが見られることを期待している。

4	日本体育大学	10時55分56秒
5	中央学院大学	10時56分01秒
6	中央大学	10時56分03秒
7	日本大学	10時56分53秒
8	東京国際大学	10時58分53秒

一瞬のうちに目の前を 駆け抜けた「C」の ユニフォーム

学生記者 木村結 (法2)

多くの人々が出場校の応援に駆けつけ、気温の高さが応援の熱気をさらに加速させているように感じた。年配の方々から子供たちまで、至る所で中央大学の旗を振りながら応援する姿が見られた。



私はフィニッシュ地点から約100メートル手前の場所で取材しながら、必死に応援もしていた。テレビ画面越しでなく、現地で選手たちの走りを見て、その速さに圧倒された。想像していたよりもずっと速く、20キロ以上を走ってきたとは到底思えないほどの全力疾走に見えたからだ。

選手が次々と駆けてきて、胸に「C」マークのユニフォームが一瞬のうちに目の前を通り過ぎた。力強い走りに感動し、声をか라していると新たな気づきもあった。何より直接、選手たちに声を届けられている気がして、うれしかった。

日々、選手たちのサポートに奮闘しているマネジャー、阿部朱音さん(法4)に話を聞くことができた。彼女にとって、次が最後の箱根駅伝となる。予選会については「練習のときから4年生が引っ張り、集団でまとまってゴールすることを意識していた。終盤は皆がきつそうだったが、最後にペースを上げて頑張り、日々の積み重ねが生かされているような走りだった」と振り返った。

いつも近くで見ている存在だからこそ、選手たちの頑張りやうれしそうに称える姿が印象的で、予選会突破に安心している様子も感じ取れた。さらに、箱根駅伝に向けて「今年は実力を発揮できず、悔し涙を流した。来年こそはうれし涙を流せる結果となるよう、全力でサポートしていきたい」と言葉に力を込めた。選手とマネジャーの一体感が伝わってきて、胸を打たれた。

箱根本戦までの短い期間で、選手たちはさらに練習に励み、きっと予選会以上の走りを見せてくれるだろう。予選会での頑張りを目の当たりにしたことで、正月には一層、声を大きくして応援したいと強く思った。



チームを支える陸上競技部長距離ブロックのマネジャーたち

シード権確保ならず、 伊勢路は12位 全日本大学駅伝対校選手権

大学三大駅伝の一つである「秩父宮賜杯第56回全日本大学駅伝対校選手権」は11月3日、熱田神宮(名古屋市)一伊勢神宮(三重県伊勢市)の8区間・106.8キロで争われた。中央大学は12位(5時間19分49秒)となり、翌年出場のシード権(8位以内)獲得はならなかった。

秩父宮賜杯第56回全日本大学駅伝対校選手権大会
(2024年11月3日、熱田神宮一伊勢神宮 8区間106.8キロ)

● 総合成績

順位	大学名	記録(時・分・秒)
①	國學院大	5・09・56
②	駒澤大	5・10・24
③	青山学院大	5・10・41
④	創価大	5・13・17
⑤	早稲田大	5・14・24
⑥	城西大	5・14・57
⑦	立教大	5・16・21
⑧	帝京大	5・16・24
⑨	東京国際大	5・17・46
⑩	日本体育大	5・17・52
⑪	大東文化大	5・18・08
⑫	中央大	5・19・49

(上位12校)

● 中大・区間成績

区間	選手名	学部 学年	時間(分・秒)
1区 (9.5キロ)	溜池一太	文3	28・31②⑩
2区 (11.1キロ)	岡田開成	法1	31・53⑥
3区 (11.9キロ)	本間颯	経済2	34・31⑥
4区 (11.8キロ)	浦田優斗	経済4	35・03⑬
5区 (12.4キロ)	東海林宏一	経済4	37・10⑨
6区 (12.8キロ)	佐藤大介	文1	38・11⑦
7区 (17.6キロ)	吉居駿恭	法3	53・22⑭
8区 (19.7キロ)	阿部陽樹	文4	61・08⑱

(注) 丸数字は区間順位

学生時代は自分を大切に
やりたいことに一生懸命に取り組んでほしい



法的思考の 基礎を培った中大時代

女性で初の就任 法学部卒業生の
畛本直美検事総長にインタビュー

Interview
学生記者 木村結(法2)

中央大学法学部の卒業生で、女性として初の検事総長に2024年7月に就任した畠本直美(うねもと・なおみ)氏(1985年卒)は、検察トップという立場で多忙な毎日を過ごしている。就任まもない8月に、法学部に在籍する後輩の女子学生として、「HAKUMON Chuo」学生記者としてインタビューする機会に恵まれた私は、検察官としての職責や日々の業務、法曹を目指したきっかけ、中大学生だった頃のこと、現在の中大学生へのメッセージなどをお聞きした。

(インタビューは8月29日、中央大学学生会〈同窓会〉の機関紙「学員時報」取材と合同で行われました)

——中央大学に入学した理由、法曹を志した経緯を教えてください

畠本検事総長 もともと歴史や文学、社会科学などが好きな文系(のタイプ)でしたが、司法試験を受けて法曹になろうと決意したのは大学3年生のときで、そこから(本格的に)勉強を始めました。高校生の頃から、女性が社会に出て仕事に就きたいと思ったとき何か資格があった方が有利だとも思っていましたし、法曹を目指すなら「法科の中央」として有名な中央大学であると思い、志望しました。

また、多感な時期で「親元から離れて一人暮らしをしたい」という思いが強く、多摩の中大なら自宅から通えないと(笑い)。親に反発と言いながら、親のすねかじりで一人暮らしを始めたんですけどね。

「自分は何をしたいか」

モラトリアムの2年間が大切な時期だった

——どのような学生生活を送られたのでしょうか

畠本検事総長 入学後は毎日、友達とボウリングをして遊んだり、好きな本をずっと読んだりと好きに時間を使って過ごしていました。「自分は何をしたいんだろう」「大学を出たら何をしようかな」と、ぼんやりと考えていたような時期でした。そして、大学3年生の秋に「法律は面白い。まじめに取り組もう」と進む道を決めて、勉強できる環境を得ようと、研究室(郁法会)の入室試験を受けて合格しました。それからは1日10時間くらい集中的に勉強をしていました。いま思えば、何をしたいのか分からなかったモラトリアムの(大学1、2年生の)2年間が大切な時期だったと思います。だから、「これだ」と思った法曹という目標に向かって取り組みました。

——大学時代に得たもの、学んだことで仕事に生かされていると感じることはありますか

畠本検事総長 (法学部での学修が)法的思考の基礎、法律的なものの考え方の基礎を与えてくれたことです。「もっ

と学びたい」と思ったときに、学びを深めてくれる環境がありました。郁法会に入り、先輩との「条文ゼミ」で、条文それぞれの法律要件や効果について仲間の考え方を口頭で聞き、基本的な法律の見方や観点などを学ぶことができました。法律書を読んで生じた疑問や考えを研究室の人たちと議論できる環境があったことが非常にありがたかった。

授業では渥美東洋先生の刑事訴訟法と、木内^{よしひこ}彦先生の手形小切手法の講義がとても好きでした。先生方から法的思考とは何かということや、法律が「社会はどうあるべき」という価値観に裏打ちされているということを教えていただきました。

——法曹3者のうち、検察を選ばれた理由は何ですか

畠本検事総長 法律を勉強する中で、刑事法、刑事政策には「人の人生が詰まっている」という感じがしたんですよね。犯罪はやってはいけないことだけれども、どうしてそういうことになってしまうのか、それにきちんと向き合いたい気持ちがありました。そして、司法試験に受かって、仙台で実務修習をしたとき、検察庁には、人間くさい感じの方が多くて、面白かったんです。指導担当ではない方が夜、修習生を飲み連れていってくれて、太宰治の小説の話とか哲学青年がするような議論をしました。そういうのが私は好きで、生身の人間に興味、関心を持って、きっちりと向き合いながら仕事をされている方がいるんだなとわかり、志望したんです。

検察は上命下達ではなく、納得いかなかったら(上司、部下に関わらず)話し合えて、外から見るとフラットに議論しているところもあります。それは修習生の頃に感じた印象と変わりません。

さまざまな職種を経験

一線の検察官が働きやすい環境をつくる

——これまでのキャリアと、現在の仕事の内容を教えてください

畠本検事総長 キャリアの半分は検察官の仕事である公判や捜査に当たっていました。その後のキャリアでは法務省の刑事局、民事局、保護局、人権擁護局、法務大臣秘書官とさまざまな職種に就きました。法テラス(日本司法支援センター＝法的トラブルの解決に必要な情報・サービスを提供する、国が設置した総合案内所)への出向や司法研修所の教官も経験しましたね。

いろいろな経験をする中で、やりたい仕事(職種)を自分で決められなかったことが良かったと思っていて、自分の希望で選んでいたら、ここ(の部署)に来たかどうかかわらないのに、それぞれの仕事がどれも面白かったんです。いろいろなことを学べるというのが本当にありがたかった。

——検事総長としての抱負を教えてください

畠本検事総長 証拠を集めて真相を解明し、真相に見合った妥当な処分を行っていくという検察官の職責は、決して



畝本直美検事総長

うねもと・なおみ。千葉県出身。県立千葉高校卒、1985年中央大学法学部法律学科卒。1988年に東京地検検事となり、2021年7月に女性初の検事長として広島高検検事長に就任。2023年1月には検察ナンバー2の東京高検検事長に就任した、中大出身の検事総長は3人目で、就任は2024年7月9日付。中大時代は、小説家・劇作家の筒井康隆さん、詩人の中原中也らの作品を愛読していたという。

簡単なことではなく、大変な仕事です。しかし、その分やりがいを感じられる仕事です。最高検察庁があり、8つの高等検察庁、50の地方検察庁がある中で、地方検察庁が主に個々の事件に対処していますが、一線の検察官、検察事務官らが、どういうことに困っているのかを把握し、働きやすい環境を作りたいというのが抱負です。

検事総長として壁を作ることなく、自分から聞きに行ったり、若い人と接する機会を作ったりしたい。捜査、公判に役立つことをしたり、より良い職場とするためにワークライフバランスを整えたりするなど、幅広く仕事をしていきたいと思っています。

——法学部で以前は少数だった女子学生が近年増加していることをどう受け止めていますか(畝本検事総長の入学時に1割に満たなかった法学部の女子学生は、2024年度には学部生5711人のうち2527人と約45%を占めている)

畝本検事総長 法律は社会の紛争解決のためのルールであり、それを扱うのが法律家だから、世の中が男女同じくらいの数なのに、法学部が男子ばかりであることに疑問を持っていました。女子の割合が増えてきたのは自然の流れであり、良いことだと思います。在学中は女子の数が少なかったもので、同じクラス、ゼミでない女子も大体は顔見知りでした。入学式で近くに座り、声をかけてくれた女性とは今も仲がよいです。

——法曹で活躍する女性が増え、令和4年12月採用の新任検事に占める女性の割合は49.3%と半数近くになったと聞いています。これは政策的に進められているのでしょうか

畝本検事総長 意識的に女性を増やそうとはしていません。検事の適性がある人を修習生から探して、その結果、女性が増えているということだと思います。真相解明への熱意やリーダーシップ、警察など他機関と連携してコミュニケーションを図れるかなど、いろいろな適性が必要ですが、そうした適性をもった女性が多くなっているということではないでしょうか。

採用時に女性が増えてきているのは良いことだと思いますが、その後、検事の仕事を持続してもらう仕組みづくりも大切です。家事や育児の負担や、仕事との両立、転勤などの問題に対処し、検事に採用された女性が働き続けていくための対策を取っていかねばなりません。

広い視野を持った柔軟な人材の輩出に期待

——ストレスやその解消法はありますか

畝本検事総長 (事件や公判のことが)寝ても覚めても頭から離れないことはありました。(勾留期間などの)限られた時間で精いっぱいできることを行うというのは、ストレスといえるかもしれないけれども、逆にそれがあるから、何かできたときは「やった」と(達成感を)感じられます。現在のストレス解消法は、何も考えない時間をつくることです。ジョギングは12~13年前に始めましたが、リズムと呼吸だけに集中できて、リラックスできます。一人旅もストレス解消法かな。行きたいと思ったところに気ままに向かってしましますね。

—— お忙しい中で母校のことを意識するときはありますか
畝本検事総長 (学会会の) 東京検察支部の支部総会に最初
に出席したときは、中央大学出身の検察官の先輩がこんな
に大勢いるんだと驚きました。転勤した高知や広島では、学
員会の支部の皆さんが歓迎会を開いてくださり、親しく話
ができて、知らない土地でとても心強く、ありがたかったで
す。(中大は) 多角的な広い視野を持った柔軟な考えを持っ
た学生、人材を多く輩出する大学であってほしいと思っ
ています。

箱根駅伝は必ず見えていますよ。仲のいい友人と連絡を取
り合って皆で応援しています。頑張ってもらいたいですね。

—— 後輩の中大生にメッセージをお願いします

畝本検事総長 学生時代はいろいろなことを見ようと思え
ば見られる時間があるし、やりたいことをやったらいいと思
います。やりたいことが決まっている人はそれに向かって一
生懸命にやればいいですし、(やりたいことが) まだわからな
くて、もやもやしていても、そういう時もあると思います
から。あまり人と比べないで、自分を大切に考えて頑張った
らいいのではないのでしょうか。



取材後記

大学生活での挑戦や経験 「すべてが将来への意味あるもの」

学生記者 木村結 (法2)

厳かな空気に包まれた最高検察庁の一室で、緊張しながら
インタビューの開始を待っていた。実際に取材が始まると、畝本
直美検事総長はとても親しみやすく、話しやすい方で、たちど
ろに和やかな雰囲気になった。おかげで、私もすぐに緊張が解
け、リラックスして取材を進めることができた。このような朗ら
かな人柄も、検察トップに就任された理由の一つであるように、
私には感じられた。

一番印象に残ったのは大学3年生の秋から司法試験の勉強
を始めたということだ。当然、大学入学後すぐに法曹の道を目
指して勉強を始めたとは思い込んでいた。2年生までは自由に、
好きに、やりたいことをしていたという。そして、いま振り返る
とその時期があったからこそ、明確な目標＝法曹を見いだした

とき、集中して取り組むことができたと話されていた。

私自身、将来進む道について迷っている最中である。具体的
に何をやりたいかはあまり決まっていない。大学3年生になる
来年には進路を固めないといけないと少し焦ってしまっている。
しかし、畝本検事総長の言葉から、友達と遊んだりサークル活
動をしたり、新しいことに挑戦したりといった大学生活のすべ
てが、将来につながる意味のあるものと感じられた。そう、焦る
必要は全くないのだ。

この学生記者の活動を含め、やりたいと思ったことに挑戦し
てきて、すべてが経験として自分に身についている気がする。そ
うした挑戦や経験が将来へとつながり、目標が定まったときに
生かせる糧となることを願っている。

私も学んだことのある法律名を例に出して、分かりやすく説
明してくださったときは、検察トップの方と法律面で意思疎通
ができた気がして胸が弾んだ。時代は違っても、同じような環
境で授業を受けられていると感じ、授業をより意義のあるもの
にしていこうと、意識を高められた。

同じ中央大学法学部で学ぶ後輩の女子学生として畝本検事
総長の存在を誇りに思っている。人生観などを見つめ直す学び
の時間ともなった今回のインタビューは、ずっと心に留めてお
きたい経験になった。畝本検事総長のように素晴らしい芯のあ
る考えを持てる人になりたいと感じた。お忙しい中で貴重なお
話を伺うことができ、心より感謝申し上げます。





留学中、イタリアに旅行したときの一枚

ワークライフバランス、QOL…就活を控え、 働き方への固定観念を 変えた10カ月 南デンマーク大学に交換留学

学生記者 倉塚凜々子(国際経営4)



初夏のオーデンセ

「HAKUMON Chuo」学生記者の倉塚凜々子さん（国際経営4）が、デンマーク・オーデンセ市の南デンマーク大学に交換留学した約10カ月の経験で学んだこと、心に残った出来事、見聞きしたことなどを報告します。

私は2023年9月から2024年7月まで、南デンマーク大学への交換留学生としてオーデンセに滞在しました。デンマークという国に興味を持つきっかけは、高校時代の英語の課題で、たまたま「hygge」（ヒュッゲ＝心地よく安心感のある楽しい雰囲気のことを表すデンマーク語）という文化を知ったことです。同時に国連が発表した世界幸福度ランキング2位の「幸せの国」であると知り、どのような国なのかを実際にこの目で見たいと思い、留学先を選びました。

「Faculty of Business and Social Sciences」という名前の学部には所属し、政治心理学や法学、環境経済学、スカンジナビアの歴史と福祉など、幅広くさまざまなジャンルの講義を受けることができました。授業は英語で行われましたが、中央大学でも国際経営学部で大半の授業を英語で受講していたため、特に苦にしたことはなかったです。

カリキュラムの重点

「意見を持つ」「主体的に何かを導きだす」

授業では、大人数クラスでも毎回のように行われるディ

スカッションの中で、視野を広げながら答えを導くという、知識を咀嚼し、アウトプットして理解するまでの過程がひと通り行われていた印象があります。試験レポートでも、正解を書き連ねるよりも自分の視点や経験から意見を述べたことが高く評価されたという感覚を持ちました。

自分の意見を述べさせるレポートを課すクラスが多く、「意見を持つこと」「主体的に何かを導きだすこと」に重きを置いたカリキュラムでした。

「ビジネスの歴史」というクラスがとても興味深い内容で、ほとんどの大国が工業化で経済発展を遂げる中で、デンマークは農業で発展を遂げた数少ない国の一つであることから、途上国の発展に資するような“秘訣”など、酪農大国だからこそ学べる新しい視点を知りました。後継難などに直面する日本の農業の打開策を考えるきっかけになるかもしれないとも思いました。

ルームメイトの郷土料理 日本茶の普及活動

大学から自転車で30分ほどの寮に住み、ルームメイトの女子学生は、秋学期がメキシコ人と台湾人、春学期はイタリア人と中国人でした。それぞれの国や地域の就活事情や大学生活の様子を語り合い、面白かったです。

寮生活は初めてで、それぞれバックグラウンドが異なるため、衛生観念の違いなどに戸惑いもありましたが、その都度、話し合って、互いに快適に生活できるように努めました。彼女たちが作る故郷の家庭料理の味も楽しみました。



後ろはアンデルセンの生家

日本茶の素晴らしさを世界に広める「国際日本茶協会」のプロジェクトとして、留学先で日本茶の普及活動をする「日本茶エバンジェリスト」の活動にも取り組み、デンマークに留学に来ている他の日本人学生のエバンジェリストと一緒に、「コペンハーゲン桜フェスティバル」に出店。週末の2日間で日本茶に加えて、お団子 1300 本を売り上げたことも楽しい思い出です。日本文化について多くの人にアピールできたと思います。

緑茶や抹茶のことを全く知らなかったルームメイトにも、和菓子とともに楽しんでもらったり、食事会でお茶を提供したりしました。

さまざまな活動や、留学中の出来事を通して、以前は見過ごしていた日本文化の魅力や日本の細やかな技術力を再認識できたと感じています。

「個人主義の国」での気づき

デンマークは良い意味で「個人主義」の国であり、他人に干渉しすぎず、私自身も周りの目を気にしすぎることはなく、日本で暮らす以上にリラックスして日常生活を送れました。仕事を大事にするのと同じくらい、あるいはそれ以上に家族や趣味を楽しむことを大切にする文化や暮らしぶり

に触れて、留学後に就職活動を控える私は、働き方に関する固定観念を捨て、一から考え直す良い機会になりました。

留学を通じて、「ワークライフバランス」「QOL (Quality of Life) = 人生の質、生活の質」という漠然と捉えていた概念を、より明確化できたように感じます。就活を目前にして、人生設計の重要な部分を考えるチャンスを得られたことは大きかったです。観光ではなく、現地に住む人として「幸せの国」に身を置いて有意義な時間を過ごし、高校時代からの夢を実現できて満足しています。

留学を迷っている人には、「現地に滞在すると想定内のことも想定外のこともあり、とても刺激的で楽しい」ということを伝えたいです。学生生活の選択肢の一つとして、留学を考えてみてほしいと思っています。

南デンマーク大学

オーデンセ大学と南デンマーク商工大学、南ユトランド大学の3校が合併し、1998年に設立された。人文学部、自然科学学部、工学学部、人文科学部、健康科学部の5学部がある。デンマークの大学としては最も新しい大学。



自転車社会のデンマーク



アンデルセン壁画

童話作家、アンデルセンの故郷・オーデンセに暮らし、学ぶ

デンマークは、首都コペンハーゲンがあるシュラン島、第2の都市オーフスがあるユトランド半島、滞在した第3の都市、オーデンセのあるフン島を含む 440 以上の島からなっています。オーデンセは童話作家、アンデルセンの出身地としても有名で、新国立競技場のデザインを担当した建築家、隈研吾さんが設計したアンデルセン博物館があります。10 カ月の留学生活は、新鮮な発見の毎日でした。

幸せの国の四季

晩秋から冬は晴れの日が減り、日没も早まるため太陽の光が恋しい時期です。街がきらびやかに彩られたクリスマスが過ぎ、日の光に当たれなかった1週間は、精神的にかなり堪えた記憶があります。晴れの日が多い日本の冬が恋しくなりました。冬が長く厳しいからこそ、暖かな春を感じたときの喜びはとても大きかったです。幸福度の高い国ながら、うつ病の発症率が高い要因の一つに、この冬季の日照時間の縮小があるといえます。

春から初夏は心地よい気温の日が続き、夜 11 時頃まで明るい地平線や青空、一面に花が咲き誇った牧草地などの光景に、「幸せの国」を感じました。

趣味の時間、家族との時間

オーデンセは、大都会のような気ぜわしさはなく、平日でもランニングなどのスポーツやひなたぼっこを楽しむ人の姿が目につきました。レストランなどの店が土曜日夕方には店じまいして、日曜日にも営業していないという光景に驚き、ヨーロッパ圏外から訪れた留学生の友人と「稼ぎ時なのね」と言葉を交わしました。

ただ、デンマーク人の友人から、「稼いだお金を使って家族と過ごしたり、趣味に当てたりする時間がなければ意味がない」と言われ、なるほどとも思いました。日本以上に、趣味や家族と過ごす時間を仕事と同様に大切にしている社会ということに気づかされました。

自転車社会

治安の良い北欧の国ですが、「デンマークで唯一盗まれるものは自転車」という言葉がありました。頻繁に盗まれるほど生活に欠かせない移動手段として普及しています。幅の広い自転車道や自転車専用の信号機の整備、手信号や二段階左折などのルールがあり、安全で快適に運転する環境が整っていました。自転車と一緒に乗る人専用の国鉄車両や、自転車で遠足に出かける幼稚園児の姿も目にしました。冬場の道路の除雪は自転車道が優先されます。

デンマークと移民

オーデンセに来て初めての感想はアジア人は少数派で、中東にルーツを持つ人たちが随分と多いということでした。街中にトルコの代表的な料理である「ケバブ」の店が多く目につき、大学でも中東出身のクラスメイトがいました。暮らしている人の出身国は、想像以上に多様です。

中東での紛争への人々の関心も高く、パレスチナ問題に対する大規模な抗議デモや、武装した人たちが交差点で通行を妨害するような光景も目にしました。治安や身の安全への漠然とした不安を覚えたこともありましたが、宗教や文化の持つ重要な意味と、オンラインが普及した現代において、実際に足を運んだ場で見たり聞いたりすることの価値や重要性を再認識する機会になりました。